

今田純子（元朝日放送「ABC ギャラリー」、「大阪府立現代美術センター」館長、1934-）

2019年3月1日（金） 大阪市役所内会議室

*ABC ギャラリー：大阪市天王寺区上本町にあった展示会場。旧近鉄社屋ビル内。

*大阪府立現代美術センター：1980年から大阪市北区中之島にあった美術館。2010年、大阪市中央区大手前に移転、2012年閉館。大阪府民ギャラリー（1974-1980年、大阪市北区堂島）は前身。

—ご出身はどちらですか？

生まれたのは三重県なんです。親が実家で産んで。ですけど育ったのはほとんど阪神間です。一番長くいたのが武庫之荘。

—ご家庭は何かお商売をされていませんか？

いいえ。父は貿易 [の仕事に就いていて] 外国人の社員さんがいました。その前はジャパンタイムス。

—国際的なご家庭ですね。

そうですね、[父は] 海外に行ったり。戦争前ですね。

—ずっと阪神間で育てられて、学校も。

中学校は神戸の学校なんですけれども。カトリックの尼さんの、いわゆるインターナショナル・スクールで、小さな学校です。4年間そこへ行って、英語とフランス語、初歩のラテン語を学んで。その時に一緒にソフトボールをしていた友達が「このままで行ったら大学を受けられないよ、この学校は」と教えてくれたんです。「そうしたら、学校変わらなあかんね」って2人で相談して。海星 [神戸海星女子学院] って王子公園にありますけれども。あそこも同じカトリック系だったので、あそこ、私は祖母が姫松というか帝塚山のほうにおりましたので、そこから近い学校というので大阪府の学校とふたつ [受けようということになりました]。女子大 [旧・大阪女子大学、現・大阪府立大学] から5分位のところですね。母が近い住吉高校へ願書を貰いに行って、間違って阿倍野高校の願書を [もらってきて]。その頃、戦後で校舎がなくなって同居していたみたいで。電話をしたら「娘さんならうち [阿倍野高校] の方が良い」と言われて。せっかく貰って来たんでそこを受けなさい、ということで。阿倍野高校っていうの受けたんです。4年間国語をしていなかったの、面接で「徒然草」が読めなくて。編入です、2年生から。

—阿倍野高校は工芸高校 [大阪市立工芸高等学校] のすぐ近くですね。

はい、そうです。武庫之荘から通ったり、祖母の家のある姫松から通ったり。気楽な時代でしたから。当時は週休2日制だったんです。土曜、日曜が休みで。

—早いというか、その後そうなるんでしょうけれどね。

いえいえ、逆です。その後ね、もっと勉強させなくては、ということで私の次の年くらいから土曜日も半日学校へ出るようになったらしいんですけど。私の時は神戸の学校も週5日制でしたし、[阿倍野]高校も5日制だったからのんびりしてました。

阿倍野高校から、独立して大学に行きたいな、と思って。友達でしっかりした人がいて彼女に相談したら、「京都だったら通いにくいし、いいんじゃない」って。「それじゃあもう、あそこ受けようか」って言って受けたんです。本当に運が良くて。高校2年生で、神戸の学校っていうのがすごくのんびりしたところで、代数の初歩くらいまでしかやっていなかったの、三角関数が全然わからなくて。先生に、「転入生、読んでみろ」って言われて。 α だとか β だとかサインだとかコサインだとか、何のことかわからなくて。「 α 、 β 読めません」で言ったら、ちゃんと真面目にやってるのかって(笑)。だから仕方なくて数学は完全に。まあ担任の数学の先生も良かったんですけども、自習でやりました。岩切の解析精義、表紙は黄色でした。

—そしてその後、大学に進学されるのですよね。

はい、そうです。1年の時は[キャンパスが]宇治だったんです。通いました。当時はすごかったんです、ラッシュが。本当に。京阪っていうのはたくさん学校があったんですね。信愛[大阪信愛女学院]、聖母[女学院]、同志社[高校]。いっぱい学生がいて、もまれて通いました。2年生の時に吉田に移り、1年上の女子学生の方たちが心暖かい厚生部長と寮を作る運動をしてくださって。それが橋本記念館という、大学の学部の教授の記念館だったんですけども。離れ付き二階建てで、要所要所に丸太の支持棒が付いた、当時なりの耐震構造が付いていました。それが大学から歩いて5分位のところで、そこを寮にしようということで。親に言ったら、親も寮だったら安心、ということで。寮費は月100円、自炊といういい加減な寮だったんです。自治寮というか。門限もなくて、留守番の老夫婦が同居してただけです。男子寮、吉田寮ほどではないけれども。2畳で床は歪んでいるし、裏は墓地だし。本当にすごい寮でした(笑)。寮だったら良いだろう、ということでそこに入りました。

—大学全体でも女子学生は当時少なかったのではないですか？

私の学年は…。同じ学年の方が書かれた随筆には女子学生34人とか書いてあって。本当かどうか知りませんが、随筆ですから。

—じゃあ、いわば先駆けですね。

先駆けといふかなんといふか。遠方から来てる人もありましたし。

—学部は文学部ですか？

文学部です。フランス語学、フランス文学。親とか親戚はね、うちは医者が多いので医学部、って言われたんですけども。私は絶対あんな…切ったりっていうのはダメな方で。工学部だったらいいなあと。建築をやりたかったんです。ごちゃごちゃ言われるよりは文学部でおとなしく。よかったです、文学部。すごく。いい先生がたくさんいらっやって。

—当時、大学にはどんな先生方がいらっやいましたか？

桑原武夫 [1904-1988]、生島遼一 [1904-1991]、伊吹 [武彦、1901-1982] 先生もそうですし。あと、助教授でもたくさんいらっやって。

—それで京都に住まわれて。2年間ですか。

3年間ですね。

—卒業されて、就職になるわけですね。当時の就職事情はいかがでしたか？

すごく氷河期で、同級生もほとんど就職がうまくいなくて。私は先生になりたかったので、中学校へ教育実習にも行って。英語を教えていたんですが、大学ではフランス語とドイツ語しかとっていなかったの、単位がないから駄目といわれました。

だから掲示板に募集先を見に行って。いろいろ貼り出されるんですね。毎日それを見に行くんですけども、たまたまふたつだけ受けていいということで貼ってあって。[そこには] マスコミしか貼られていなかったの、そのふたつを受けたんですけども。そのひとつが朝日 [放送] で、もうひとつが毎日 [放送] です。

—毎日放送はもう独立していたんでしょうか？

[当時] 毎日放送は新日本放送ですね。大阪はテレビが1チャンネルしか取れなかったの、朝日 [放送] と毎日 [放送] で一緒にやっていたらしいんですけど。私が受けた年はテレビの募集がなくて、ラジオ。だから両方ともラジオでした。

—朝日放送のラジオっていうのは朝日新聞のビルに入っていたのですか？

朝日新聞のビルの隣にいわゆる朝日会館ビルがあって、そこにあったんじゃないかと思うんですけど。黒い [ビル]。朝日会館のホールが上にあって、音楽会をよく聴きに行っていました。

—錚々たる音楽家たちが来られていたのでは。

良い方たちが来て。朝日新聞が偉かったのは、アゴットって言って、AGOT って書くんですけれど、「朝日学生音楽友の会」っていうのを主催していて。私も高校に入ってそれを知ったんで、メンバーに加わって。だから良い音楽会を聴きに行けたんです。そうしたらね、あのホール柱があっただけ。でもあそこしかなかったですね、当時は。うちの母なんかは音楽会っていったら中之島公会堂に行っていましたね。

—その流れがフェスティバルホールに行くんでしょうね。

—そうです、そうです。

—朝日会館の、黒いビルがあった頃ですね。

—そうです、そこで入社試験。ああ、入社試験は最初は関大 [関西大学]。天六 [天神橋筋六丁目] の関大で筆記試験を受けて、面接は朝日のビルでやったんですね。

—就職されて、ではそこにお勤めになったと。

—それが、たまたま受験する頃に奨学資金が出るからアメリカに行かないか、っていう [話があって]。それも試験を受けなきゃいけないんですけど、それを言われて。受験の面接の時に「実はこういう話があって受けようと思っておりますが」って [伝えて]。「受けて通るかどうかわからないけれど、通ったらここに入社できて行かせていただけますか」って聞いたら、「それは結構ですよ」って。そうしたら上手く通って。

—では、入社と同時にアメリカへ。

—入社せずにアメリカへ行って。アメリカで1年 [過ごしました]。大学にいた時にも神戸女学院にアメリカン・フレンド・サービス・コミティ (AFSC) っていう協会が主催している学生の会議があって。それに桑原 [武夫] 先生が行って言ってくださったので行ったんですけど。アメリカでも出ないかって言ってもらったので出たら、「次の年の夏にはフランスであるから行かないか」って言っていただいて。1年の約束でアメリカに行ったんですけど、2年に伸ばしてもらって。遊んで来たんです。

—その時にフランスに行かれて。

—はい。フランスに行ったり、イギリスに行ったり、あちこち。

—じゃあ、入社は2年後になったんですか？

—はい。そう言ってくれたので。

—今ではなかなか考えられないような状況ですね。採用を出してから2年間…。

ラッキーだったと思うんですけど。落ちるか通るか分からなかったから、はっきり申し上げて。

—アメリカにいかれたのは何年ですか？

1957年です。昭和32年。

—宮永理吉さんも1960年にアメリカに行かれていますよね。

そう、理吉さんも行っているし、森野泰明〔陶芸家、1934-〕さんも。柳原〔睦夫、陶芸家、1934-〕さんも行っている。

—アメリカはどちらへ行かれたのでしょうか？

私が行ったのはミシガン州のランシングっていう、ものすごい田舎でした。ランシングが州都で、その隣のイーストランシングっていうところは全部がキャンパスタウンで。だからのどかでした。大学院でも寮に入って。ものすごく寒いところです。

—そこで留学の形になるんですね。

そうです。寮にいて、週末にスポンサーの奨学資金を出してくれたロータリーインターナショナルのクラブのあちこちへ話をしに行っただけです。だからきつかったです、結構。でも楽しかったですけどね。いろんなおうちに泊めてもらって。奨学資金は1年なんです。その次の年にAFSCの。奨学金は会議に出る分と往復だけ〔の支給〕です。後は多少親から。

—それで1年はフランスやイギリスやヨーロッパをいくつか回ってらっしゃったんですね。

はい、適当に。ちょうどその会議で会ったトルコの人たちがふたりいたんですけど。彼らと一緒にトルコに来ないかって言ってくれたので、フランスからスイス、ドイツ、オーストリア、ユーゴスラビア…当時はまだユーゴスラビア。あの辺を転々としながら最終的にイスタンブールに行っただけです。イスタンブールの人のお家に泊めてもらって。

—なかなか当時あの辺にいらっしゃる方って少ないんじゃないですか。そもそもヨーロッパに行く方が少ないですけども。

だからフランスに行った時も、ベトナム人とか中国人とか。日本というのはなかなか出てこなかった。1958年ですね。

—パリでもまだ日本人は少なかったでしょうね。

そうですね。知りませんが、どのくらいいらっしゃったのか。

—泉茂 [洋画家、1922-95] さんが行かれたのはニューヨークですよ [1959年]。それより早いんですね。それで帰ってきてやっと就職になるわけですね。

はい。

—それでラジオの方でお仕事をされて。

はい。元々募集していたのがアナウンサーで。アナウンサーとして受けたら「どうしてアナウンサーになりたいのか？」って聞かれたから。「私はアナウンサーにはなりたくないんですけども、おたくはそれしか募集していなかったの」と言っただけで。他の部署に行きたいのか、って聞かれて。「行きたいです」って言ったら、そうしたらそれを含めて入社を許可するっていう電報が来ました。それで一応就職先は [決まって]。毎日 [放送] も運よく通ったんですけど、1日先に [合格通知] が来たのが朝日 [放送] だったから、やっぱり先に来た方に行かなきゃいけないということで。

—2年して帰ってこられて入社されて、最初はどんなお仕事をされたんですか？

考査部って行ってね。調査とか、割合お勉強をよくしました。数学のお勉強も。

—考査部には何年いらっしゃったんですか？

3年か4年か。それが潰れて国際課っていうのができて。そこへ行って。

—それはもう適任ですよ。

いやいや。何かかんかして70年万博の時は万博の仕事をして。

—朝日放送が何か万博に出展をされたということでしょうか。

出展というか、まあ企画があって。「世界のおまわりさん」と「ミス・ユニバース」、その柱がありました。世界のおまわりさんと呼んでくるという。その交渉と現場と [担当しました]。

—万博の時は何年くらい前から準備を始めたんでしょうか？

いちばん詳しいのは前田孝一 [元大阪府文化担当、元「大阪府立現代美術センター」館長] さん。あの方はずっと万博をやってらっしゃいました。大阪府から。私たちはそのうちの催しをふたつ持ち込んだだけです。でもまだ万博の土地はぬかるみで、林の中をずっと通って打ち合わせなんかを [しました]。夜は怖かったですよ。いくらタクシーに乗っているっていったって。雨が降ったらぬかるみです。まだパビリオンなんか全然建っていません。たぬきやきつねが出てきそうな。万博の時は事業部へ行って。国際課がまた潰れちゃって。先々潰れちゃって (笑)。

一事業部にいらっしゃって、朝日放送としていわゆる今のマスコミの事業部的なお仕事もされたと。

はい。だから ABC ギャラリーを作ろうという前に、いろんな [仕事をしました]。例えば海外の方を呼んで文化講演会をしたり、映画の試写会をしたり、ミス・ユニバースの通訳をしたり。駅伝があったり、篠山マラソンがあったり。いろいろありました。私は篠山マラソンは関係しなかったけれど。駅伝は大阪市の姉妹都市の大学から駅伝チームを呼んで、国際女子駅伝というのをやって。その時も関わってました。サンパウロとかシカゴとか。サン・ディエゴ、ミラノ、それからメルボルン、上海。

そんなこんなしていたら、近鉄さんからの話もあって。近鉄さんの旧社屋が空いているから、何かしようかと。うち [朝日放送]、シンフォニーホールはあるけれども美術の方は何にもないなあ、ということで。じゃあ画廊をしようか、という。でもそう言いながら誰も画廊の事も分からないで、ただスペースがあるからやろう、というような話で「あなたやらへんか」と言われて。私、たまたま大学時代に美術研究会というクラブに名前につられて入ったんですね。そうしたらそこは古美術、特に仏教美術だったんですけども。今もその研究会はずっと続いていて。仲間たちも仲良しで。で、美研サロンとかいって年になんべんか展覧会を見に行ったり。年に一回は必ずバスでお寺回りをして。

一じゃあ、古美術の世界もよくご存じで。

いやあ、仏教美術ですが楽しかったです。きっちり勉強もせずに泊まりに行ったり、遊びに行ったり、という感覚なんですけれども。仲の良い友達のお父さんもお母さんも絵描きさんだったんです。秋野さんて、秋野不矩 [日本画家、1908-2001] さん。私は寮にいて。寮から 20 分歩くと京都市美 [京都市美術館] で。よく切符をもらっては、行ったり。自分で買って見に行ったり。よく美術館には、市美の方ですけど行ってました。美術だったら楽しいかなあ、と思って。「[ABC ギャラリーを] やらへんか」って言われたから、「やりましょうか」って言って。でも何もわからなくて。やらされるほうもやらせるほうも何もわからなくて。

(持参した ABC ギャラリーの資料を見ながら)

一結構広い…。382 m²。広いっていうイメージでしたよ、私も。

広がったですね、確かに。柱が 8 本あってね。泉茂 [洋画家、1922-1995] 先生と河野芳夫 [洋画家、1921-99] 先生と久保晃 [洋画家、1926-2010] 先生と一緒に、まだ全部えぐった状態の時に [ギャラリーを] 見に行って下さって。「この柱、切ってもらえ」って (笑)。「どうもそれは無理らしいですよ」って言って。どういう風に使うのか考えながら設計して。当時運営委員に木村重信 [美術評論家、1925-2017] 先生と高橋亨 [美術評論家、1927-] 先生とそれから村松寛 [美術評論家、1912-1988] 先生とにお願いしてまして。特に村松先生は大阪

芸大 [大阪芸術大学] からの帰りによく寄ってくださって。よく画廊周りに連れて行ってくださったんです、鞆持ちと称して。

—当時、村松寛さんは梅田近代美術館はもうされてなかったのでしょうか？

両方やってらしたかも知れませんね。その後、高橋亨先生。

— [ABC ギャラリーは] 大きいギャラリーですね。大阪の作家さん達はここで初めての展覧会をした方も多いでしょうね。

10月の3日、1985年。この日がオープンなんですけれども。こういうものを作るといふことで夏に記者発表をしたんですね。そうしたら、「本当にやり続ける気なのか」とか厳しい質問が飛びまして。で、私が答えざるをえなくて。「はい、やるつもりです。やります。」って。

—Ge展のことをお尋ねします。これは1985年より前からあったのでしょうか？

はい、もっと前から。

—元々はどんなグループなのでしょう？

いろんな人が入っていて。木村 [重信] 先生が命名されたらしいんです。私、「Geってどういう意味ですか？」って聞いたら、「ガイア [Gaia] のことや」って仰って。大地の神様。いろんな人に声をかけられたようで、受付でお話ししていたらお互い知らない人同士が多かった。ただ作品を持ってきて。普通の団体、秋野さんなんかは当時は新制作 [協会] だったのでよく新制作に行っていたんです。あそこはすごくしっかりした団体でしたけど。[Ge展は] 全然そんな感じじゃなくて。当時はびっくりしました。[Ge第1回展 (1975年) は大阪府民ギャラリーで開催]

要するに、[1985年、ABCギャラリーで] コンクールをするには準備が足りない。で、どうしよう言うてたら、[木村重信先生が] 「じゃあ、Geのグループに声をかけてあげよう」と。「東から吹く西の風」 [1985年、ABCギャラリー] というのも木村先生が企画してくださったもので。木村先生が声をかけると作家がバラバラと集まってきてよかったんですけれど。その次は一応何人か名前を挙げていただいて。田中一光 [デザイナー、1930-2002] さんとか早川 [良雄、デザイナー、1917-2009] 先生とかにはお願いに行きました。で、また他の方に関西発で東京在住の方を紹介していただいて、お願いしに行って。

—そういう委員の方が3人いらっちゃって。あとはここに応募してきた方から審査をして選ばれたのですね。

それと、応募されなくても。だいたい経って、私も画廊をひとりで回るようになって。この作家面白いなあと思ったりしたら、「条件はこうなんですけどやっってくださいませんか？」ってお願いした方も結構いらっしゃいます。

—スペースを貸すのにお金は？

最初、「使用料を」とると近鉄さんは仰ったんですけど。「画廊っていうのはお金なんか取らないみたいよ。こちらからお願いする場合は。」って言って。で取らないことにして。搬入、搬出費と案内状の印刷費は作家持ちにして。

—こちらから声をかけたり、あるいはここで展覧会をしたいんだ、とか。

はい、応募してきた方のほうが多いと思います。特に最初のほうは。それから先生方が声をかけてくださった場合もあります。

—池島勘治郎〔洋画家、1897-1980〕さんも展覧会をされていますね〔1986年、池島勘治郎遺作展〕。

池島さんはうち〔朝日放送〕の監査役の義理のお父さん。独立〔美術協会〕の方ですよ。亡くなっていたんですけども。

最初、〔ABCギャラリーで〕遺作展をするかしないか議論があったんですけど。遺作展もあってもいいんじゃないかと。特に関西、大阪の方だということで。池島勘治郎さん、面白い抽象の水彩画あるでしょう。

—河野芳夫さんとか久保晃さんとか、どんなお付き合いでしたか？

いろいろ教えていただいて楽しかったです。泉茂先生も。世代がいちばん上の方でしたね、当時。

—久保晃さんも、確かパリへ行かれていたんですよ。

はい。「どこか宿ないか」って〔聞かれたので〕教えたんですよ。地下鉄からすぐ〔の宿〕だし。そうしたら「高かったなあ」って言われて。「私このくらいかなあと思ったんだけど」って。でもそこへ泊まられて。

—具体美術協会（「具体」）の解散後ですが、何人か「具体」の方々もいらっしゃいますね。名坂千吉郎さん〔美術家、1923-2014〕、名坂有子さん〔美術家、1938-〕ご夫妻とか木梨アイネさんとか。

上前智祐さん〔美術家、1920-2018〕、嶋本昭三さん〔美術家、1928-2013〕、鷺見康夫さん〔美術家、1925-2015〕も。だいたい後ですけど

—3周年記念展、「現代美術の4人」展 [1988年、ABCギャラリー] というのが面白いですね。泉茂、白髪一雄 [美術家、1924-2008]、福岡道雄 [彫刻家、1936-]、森口宏一 [彫刻家、1930-2011] さん。

立体ふたりと平面ふたりという。それは木村先生と高橋先生で誰にしようって [考えてくださって]。その時はほとんど先生方が決めてくださって。その後、12人展をやった時はほとんど私が決めさせてもらって。

—5周年の時には「1990年・8人」展ですね。

8人だったかな、若い人。

—そうですね、今村源、大山幸子、川島慶樹、岸中延年、中川佳宣、中西學、濱田弘明、松井紫朗さん。 [資料をみながら] そうそう、松田豊 [美術家、1942-1998] さん。ありましたね、拝見しました。このあたりは、いろんな作家さん達とお付き合いもあると思いますし、展覧会もかなりまわってらしたし。

だいぶ知り合いができたというか。ただギャラリーだけさせてもらったんじゃないで、他に仕事があったので、なかなか画廊をまわれずに。

—当時、放送局のお仕事もされていたんですか？

はい。番組も1本持っていましたし。それから文化講演会、ミス・ユニバース。外国から来た代表にアテンドしなくちゃいけないとか、駅伝の外国チームの面倒を見なくちゃいけないとか。何でも屋さんですよ。サラリーマンですから。

—事業部のほうのお仕事は、そのままあったんですね。

はい。隙間を縫って多少は。

—スタッフは結構いらっしゃったんですか？

はい。現場、上本町の方には3人。ただ私は本社詰めでした。 [本社にも] ひとり、ふたりいたんですけど。ひとりが何か役員と喧嘩して外されてしまって。私もものすごく頭にきて、「約束が違うじゃないか」って言ったんですけど。しょうがなくって。

—当時、ものすごく激務だったのでは？

いろんな他の事とぶつかるとしんどかったですね。その期間はあまりギャラリーの事はできないというか。でも、駅伝は年に1回、ミス・ユニバースも年に1回ですから。

—この記録、これ [『ABCギャラリー10周年記念展 1985~1994+1995』] は目録ですが、当時の写真とかは残っているんでしょうか？

いや、どうなのでしょう。残ってないんじゃないでしょうか。ただ、作家さんは持ってらっしゃるかもしれません。

—特に大変だったという展覧会はありますか？

あります。椎原保 [美術家、1952-] さんの作品は3日ぐらいかかったんです、展示に [「風景の建築—椎原保」展、1986年]。その時は普通、金曜日オープンだったのにできなくて、月曜日か何かのオープンで。椎原さんは事務所に泊まり込んでやってもらって。黒い鉄とガラスの。他にも「東から吹く西の風」展 [1985年] の時にも展示に時間がかかって、朝の4時ぐらいまで。

—「東から吹く西の風」展はデザイン展ですよね。

だからバラバラなんですけれども。山田崇雄 [デザイナー、1938-] さんっていう方が展示をやってくださって。緒方規矩子 [デザイナー、1928-] さんも来てくださって。一緒にああでもないこうでもない、って言って。山田さんもお仕事が終わってからやってくださったから。

—近鉄の…

近鉄の元本社ビルです。だから古い。ただ良かったのはエレベーターは小さかったんですけど、階段が非常に大きくて広くて。いざとなったら作品を回して。

—コンクールもされていたんですか

はい。年に1回。その時は委員プラス福田繁雄 [デザイナー、1932-2009] さんと早川良雄さんが審査員になってくださっていて。ABC美術コンクール。最初はIBM、「IBM 絵画・イラストコンクール ABC&PI」展だったんです。それは運営委員の方が名前をつけてくださって。

—どういう意味ですか？このPIというのは。

ペインティングとイラストレーションを含むというような話でした。こちらは、本当に頼りない人間がいたものですから。先生方はしょうがないなあという感じだったんじゃないでしょうか。

—一緒にお仕事されていた方々は男性ばかりですか？

そうですね。ひとり女性もいましたね。その方は近鉄の方でした。それとアルバイトの女性もひとり。非常にしっかりした。

—当時、同じように社員という形でお仕事されている女性は、全体の何割ぐらいいらっしゃったんですか？

どのくらいだったでしょう。私が入社試験を受けた次の次の年から、朝日放送は女子社員を雇わなくなったんです。21年間、雇わなかったんです。

—じゃあ、もう本当に男性ばかり。

はい。女性はアルバイトか嘱託。アナウンサーも嘱託です。だからひどかったんです。ずっと女子社員を雇ってということを、組合としても言ってきたんですけど、21年間。

—それは働きやすさとしてはいかがでしたか？

みんな、真面目に働いていましたけど。私より前は結構寿退社を強制された方も多いです。

—今改めて拝見しますと [ABC ギャラリーで展示された方には] いろんな方がいらっしゃいますね。

ある意味で受け身というか、こちらが選ばなかった。たまに [こちらからも] お願いしましたけれど。だからよかったのかも知れませんが、そういう意味では。それと、美術展をやる時に放送局とか新聞社が展覧会の共催をやりますね。ああいう風なもの「あんた美術だからやれ」というので。

—ちなみにどんな展覧会をされたんですか？

いちばん大きいのは「ゴッホと日本」展 [1992年] です。京都近美 [京都国立近代美術館]。あのあたりは大変でしたね。東京のテレビ朝日とうち [朝日放送] と共催でやって。あとはそうですね。中国のミイラ展もやったし。松の廊下の忠臣蔵の [展覧会をやりました]。後はちょこちょこ小さいの。デパートの展覧会も。

—この中でお声掛けしてやった展覧会はどれになりますか。

櫻井孝身 [洋画家、1928-2016] さんはたまたまお会いしてお話をしてお願いすることにしたのかな。野村仁 [美術家、1925-] さんは朝日放送にいたし。昔、美術部に [いました]。

—野村さんはその時点で朝日放送にいらっしゃったんですか？

いいえ、もう辞めてられました。それから杉山知子、田島悦子、中西學。あと清水榎博さん、秋山陽さん、福本繁樹さん。これは福永繁樹さんと相談してお願いしましたね。もっと若い人もいたんだけど。李應魯って行って韓国の方の。これは回顧展ですけど、亡くなった後の。この時は小田実 [作家、政治運動家、1932-2007] さんが来てくれました。たくさんありますね。

—放送局のお仕事もあって、ここの現場を通して作家さん達とお付き合いもあって。そういう中で美術関係者というか、いろんなお付き合いが広がりますよね。作家さんだけでなく。運営委員の先生方はもちろんですけども、そういう周辺にいらっしゃった、協力された方とかたくさんいらっしゃったんじゃないでしょうか？

たくさんいらっしゃいましたね。本当にどっちに足を向けて寝たらいいのというくらい。

—木村重信先生、高橋亨先生それから…

三木先生。村松寛先生が亡くなった後、三木多聞 [1929-2018、美術評論家] 先生をということで。[当時] 国際 [国立国際美術館] の館長。

— [ABC ギャラリーの] 最後は 1995 年ですか。

それが最後じゃないんですけど。これが私の仕事の最後です。

—1995 年から先はどのような動きですか？

あれ、いつまでやったのかな。あと 5 年ぐらいはやっていたんじゃないかな。私も観には行っていましたがね、展覧会。近鉄があそこ [ABC ギャラリーのある旧近鉄社屋] を潰すということではなくなったんです。

—どこかに [新しく] 作るのかなあとも思いましたが…。空いているスペースの活用ということで ABC ギャラリーができたという経緯なのですね。

そうです。それとまあ近鉄さんとしたら、多分誤解だと思うんですけど、集客力があつたらデパートの方へも [お客さんを流してほしい]、という。シャワー効果じゃないですけど。

—近鉄としては、その会場を貸すというだけで特にバックアップのようなものはなかったんでしょうか？

近鉄さんが光熱費を持ってくださいました。大きいです。それから事務の女性も 1 人出してくださってました。

—1995 年にこちらの担当は降りられたということですか？

わたし、会社を辞めたんです。定年で。

—定年されてからはどのようにされましたか？

大阪府 [大阪府立現代美術センター (以下、現美センター)] は定年の8か月前、少し前から [働き始めました]。被っているんです。

— 現美センターは当時まだ…

まだ中之島にあった頃ですね。

— 現美センターでは館長を務められたわけですが、今田さんの前はどなたが館長さんでしたか？

前田 [孝一] さん。前田さんは長かったです。

— 1995年からされて、いつまでお勤めでしたか？

5年間です。65歳でやめようと思っていましたから。

— 現美センターも作家の展覧会をずっとされるという場所ですね。

はい、「今日の作家」シリーズという。

— どういう風に現美センターでは展覧会をする作家を決めていたんでしょうか？

やっぱり運営委員会っていうのがありまして、そこで決めていただくんですけども。部屋が4つありましたから結構お貸しできるんですけども。多少のルールとすれば、例えばグループ展は続けて2年はやれないとか、個展だったら2年続けてもいいとか。そういうようなね。それからできるだけクラフト的なものを減らすという。

— 現美センターがあって、その反対側というか奥のほうは芸術情報センターでしたか。

文化情報センターですね。

— やはり近鉄とは勝手が違いましたか？

全然、違いましたね。それは現美センターの方が楽です、楽と言えば。というのは結構スタッフも多かったですし。鈴木敬 [読売新聞社美術記者] さんが情報センターのほうに居られて結構楽しく教えていただいたりして。

— 現美センターはメディア関係の方が館長を務めるということがあるんでしょうか？

いや、知りません。私も突然こられて、「ならないか？」って言われて。本当に突然でしたから。全然知らないんですけども。

—現美センターで館長を務められて。運営委員さんもいらっしゃるからそこである程度決められるんでしょうけれども、現場仕事はABCギャラリーみたいにはない、ということでしょうか？

手が空いたらいつでもやっていましたけど、楽しいから。

—現美センターは「今日の作家シリーズ」等があつて。後は貸し [スペース] をされて。

そうです。「吉原治良賞美術コンクール展」と「現代版画コンクール展」は一年交代で。それとたまに企画、というか共同企画。作家のグループと現美センターとが。だからそういう時はもちろん無料でこちらをサポートして。当時はパーティーなんていくらでもできたんです。だからそういうのは現美センターがカバーする。

—苦労した展覧会の記憶はありますか。

現美センターのほうはなかったですね。ちょっと困ったのはヨシダミノルさん。あの方がテントを張ってそこ [現美センターの展示室] で家族で寝泊まりされて。「ちょっと夜はすみませんが、出てください」と言っただけ。そういうこともちょっとありますけれども、揉めはしませんでしたから。だから昼間はずっと寝てらっしゃる。生活してらっしゃる。だからクレームが事務所に来たり。これが展覧会かどうか。テントで生活しているのが作品という。

—パフォーマンスというか何と言うのか、そういうこと自体を作品化するという。

もちろんお酒も飲まれたりとか。それはちょっとやめてくださいとか。 [現美センターで働いていた] 獅子堂 [恵信] さんという学芸員の方もすごくしっかりしていらしたし。

—獅子堂さんは梅田近代美術館にいらっしゃったんですって？

だったと思います。難波のホテルの画廊に行かれてね。

—ヨシダミノルさんのお話が出たところで、具体美術協会の方とのお付き合いはありましたか？グタイピナコテカには行かれましたか？

ピナコテカはもう閉じた後ですね。あれは短かったです。私は行ったことあるんですけどね。朝日放送が近かったから。だけど全然そういう個人を知らなくて。たまたま後で白髪 [一雄] さん。私はお父様を存じ上げていたんです。呉服屋さん、尼崎の。お父様はよくよく存じ上げていて。

—そちらでお着物を作られたりされましたか？

いいえ、そうじゃなくて。お父様がロータリーの会員で。面倒見てくださったから。あとそうですね。もちろん元永さんとか嶋本さんなんかにもお世話になりましたし。若い

方たちも。今井祝雄さんはお話が上手だから。国際課にいたときの他局の連中が集まって、ジャーナリストばかりのグループができてるんですね。もう30年位になるかな。そこへ来て話をしてもらったことがあります、今井祝雄 [美術家、1946-] さんは。

—ABC ギャラリーというと、松田豊さんによくお会いしたような気がしますね。

あの方は足がご不自由だったから、車でよく来てくださってました。早く亡くなりましたね、お若かったのにね。

—1995年から大阪府にお勤めで、65歳でそちらをお辞めになって。後はどこにお勤めという事はありませんでしたか？

そうですね。市の美術館の収集委員とか国立国際 [美術館] の評議員とかお声掛けいただいてやりましたけれども。勤めはしませんでした。

—大阪の中心で10年間ギャラリーの様子を見守ってらっしゃったら、大阪の美術の流れがいちばん入ってきますね。

よかったですね。あれは本当に教えられることが多かったです。本当に、見事に何も知りませんでしたから。その日の時間に合わせて、こことここだったら行ける、とかしていただきましたから。思いがけないような作品に出会ったり、ということもありましたし。

—この時代は放送局のほうの仕事もお持ちだったのですよね。楽しいお仕事だったと想像します。

放送局は放送局で、それも楽しかったです。のんびりしてますから。例えば企業メセナ協議会っていうのに朝日新聞が結構力を入れていて。朝日放送も。私メセナの仕事もやっていたので。ABC ギャラリーで「絵画とは何か」というシンポジウムをやって。もう1回はパトロネージについて。メセナがあったので。企業メセナ協議会もうち [朝日放送] の社長がやっていたので。他の作家とかと一緒にパトロネージという事についてどう考えたらいいかというシンポジウムをやったり。あと美術でやったのは花博の時に彫刻のコンクールをやったんです。

—どういう作家さん達ですか？

森口宏一さん。オダ [マサユキ オダ] さんというアメリカに住んでいた人。名前は全部思い出せないけれど。森口さんの作品は志摩の水族館の前に。今もあるかどうかはわからないです。松本薫さんとか。

—森口宏一さんの図面関係を当室がお預かりしているんです。ご遺族と一緒に整理作業をしています。鳥羽の駅前に作品があるという話ですけれども、彼女もまだ見に行ったことがないと。

[鳥羽] 水族館。あのね、海があってここに船が泊まっていてこの辺です。その奥にホテルがあって私たち、コンクールを3人でやったんですけど。除幕の前の日からせっかく行くんだからあそこへ泊まろうと言って泊まって。森口さんは朝早くから来て、「しまった！そういう手もあったのか」っておっしゃって（笑）。

—森口さんは当時も彫刻を手がけられていますね。あの方、元々ペインティングされていたんですね。

—そうです、はい。

—彫刻の作品は、きっちり図面を描かれていますよね。

—パソコンで図面が引けないから手でやるんだって言ってらっしゃって。

—見てもわからないんですね、図面で。立面と側面と描いてっしゃるんですけどもこれがどんな風になったら立体になるのか、素人はね。

—山本製作所か何かで発注してらしたから、そこの方だったらわかるかもしれませんね。

—それでも本人が描かれた図面を施工図面みたいなものを、その、山本製作所みたいなどころでもう一度描き直しているんですね。こういう風に作るんだな、と思って。あのスペースでしたら結構大きな作品も出せたんですね。

—はい、出せました。

—大阪ではなかなかそういうスペースがなかったですから、皆さんABCギャラリーでするとなったら大きな作品を、となつたんじゃないでしょうか。

—それもあってでしょうね。逆に大きいのは団体展何かにしか出せなかったのが、何点か並べられる[広さでしたから]。大きいのは良かったですね。どういう風にその、たれ壁を邪魔にならないように使うとか。パネルをどういう風に作るかっていうのは、結構相談しながら考えたんですけど。

—電気を使った作品とか、面白い素材の作品はありましたか？

—火を使った作品もありました。下谷千尋[美術家、1934-]さん。一番奥を仕切って火を燃やされて。必ず付いておいてくださいということで承認したんですけども、それ以後はだめになりました。

—それはどんどん木材を足していくような作品ですか？

いえ、鉄のようなものの真ん中に火を置いて、そして燃やすという。すぐそれ以降はだめになりましたね。

—素材的に流行っていたものとかは感じられましたか？

流行りというのはあまり感じませんでした。みんなそれぞれでしたね。キネティックアートも初めて見ましたし、松田豊さんの。きれをばーっと垂らした作品もありましたね。池田啓子 [美術家、1948-] さんもミニマルで。ずっと床に [作品を] 置かれたりとか。小路光男 [陶芸家、1947-] さんて、この方オーストラリアに住んでらっしゃるガラスの作家で。ガラスの破片をいっぱい組み上げて。怖いです。怖いけれども面白かったですね。北田孝之 [美術家、1937-] さん。土を持ってこられて。小さな苗を植えられたり、てんとう虫を壁に這わせたり。期間中2週間ですから、その間に結構 [苗が] 伸びるんですね。私の菜園とかいう。

—ジャンルということでは本当に幅広いですね。

そうですね。インスタレーションもやりやすかったですね、あの空間は。

—若手の作家さんがそんなにインスタレーションをできるような場所もなかったですね。

そうです。それは本当にそうです。だから作品は本当にいろいろでしたね。非常にスタンダードなというか伝統的な絵画もあれば、木を組み合わせたような作品も出てきましたし。

—こういう傾向の作品を特に、というのはギャラリーとしては特別にないんですよね。

ないんです。先生方にお決めいただくわけですがけれども、ある程度の力量というか意欲があればやってもらうということではやっていたので。

—大阪というか、関西在住の人が多いのでしょうか？

多いですね、比率から言えば。

—時々外国の方もいらっしゃるようですが。

外国から、フランソワーズ・ラッツラフさんという陶芸の作家は千里に住んでらっしゃって。それから日本人で外国に住んでらっしゃった方。日本へ戻って来られましたけれども、当時は外国で作家活動をやってらっしゃいました。小路さんは今でもまだオーストラリアじゃないかな。それからロラン・ギニャールさんは息子さんが大阪に居られてお父様の展覧会をしたいということでスイスから作品を持ってこられて。

— こういうお仕事をずっとされて、お子さんもお生まれになって。

そうですね、子供が3人いましたし。結婚する時は一緒に子育てをするという約束でしたから。それと保育所を作ったんですね、団地に。子供が生まれる前に。団地の人たちと仲良くなって会社の先輩が香里団地で保育所を作ったりしたから。多田道太郎さんやら。多田さんは先輩なんですけど。だから保育所仲間というよりは同志というような。だから何かあった時は「助け合って」。

— 放送局の仕事というのは時間も大変だと思いますけれども、事業部の仕事はそれに輪をかけたような。

そうです。でもご近所の人やら友達やら夫やらが交代で。

— お生まれは1934年ですね。

ABC ギャラリーの開設が1985年。朝日放送には1957年に入社。でも、1959年からです、働き始めたのは。

— 出産はどのタイミングでされたのでしょうか？

63年、64年と、年子なんですね。あと69年かな。60年に結婚したんだから。子供の歳を忘れて、この間叱られて。

— お仕事を始められてわりと早く結婚されたんですね。当時結婚されてまだ仕事をされるというのも少なかったですか？

割合ね、会社から肩たたきがあったんじゃないでしょうか。私なんかでも聞かれましたものね。「そしたら、いつまで？」とか言って、部長なんかから。で、「はあ？」って言って。私がいたのはすごく良くて、団結力のある、仲のいい部だったんですね。今でも同窓会をやって。だいたい人がいなくなりましたが。すぐに「結婚するということを」言ったらいかんとか。言う時は連いていくからとか言ってくれて、躲して。

— 面白い時代に大規模なギャラリーをお持ちだったということ。

そういう意味で、こちらはほとんど受け身だったから。先生方はそうじゃなかったんですけど。私自身は頼りきりということもあったかと思えます。

— 皆さんが応募してきて、という形式なもの、それはそれでひとつの時代の層みたいのが見えたんじゃないでしょうか。

そうですね。そういう意味で最初に画廊を作った時は、美術の場を提供する、メセナのなそれ [考え] もありまして。だから近鉄さんと言い合ひして無料にしたり、っていうのは。近鉄は佐伯さんが会長かなんかで。無料は絶対だめ、みたいな。今も当時の近鉄の担当の方とお付き合いはあるんですけども。[当時は] 「どうしよう？」って言って。「会長に知れたら大変や」とか言ってらして。

—この10年、1985年から1995年の10年間いらっしゃって。当時は走りまわっておられたと思うんですけども、お仕事が大変で。今考えてみたらこの当時の美術に対してどのような印象をお持ちですか。

元気だったんじゃないでしょうか。すごく元気だった。例えば私がまともに [画廊を] まわりだした頃には絵画っていうのがすごく元気で。絵画だけじゃなくって。若者たちが元気だったなと思いますね。ギャラリー白さんがやっていた YES ART だとか、ああいうのがよきによきと出てきて。ある程度の年配の方たちも新しい試みを随分してらしたし。それと外国でいろんな試みをして帰ってらした作家も。下谷千尋さん。ああいう方が [帰国されて]。一番よくやってらしたのが信濃橋画廊ですけども。だからすごく面白かったというか。こんなのもありなのね、というのの連続でした。

—80年代から90年代初頭にかけての大阪の美術に関する印象をお聞きできますか。

やっぱり元気でした。それはうちで展覧会をなさる人というよりは、画廊をまわっていると思ったんですけども。こんなに若い人が元気なのか、っていう。画廊さんがお元気だったということでしょうね。まだ On ギャラリーもあったし。それから今村 [輝久、彫刻家、1918-] 先生がやってらした [大阪] 彫刻家会議。あそこも結構若い作家を育てて。鞆公園のところで。大阪市はあの頃は非常にサポートをやっていましたから。びっくりするくらい。大阪市がこんなんやるんだ、という。元気な時代でしたね。

*文中、[]内は補足。

聞き手： 菅谷富夫（大阪中之島美術館準備室 研究主幹）

国井 綾（大阪中之島美術館準備室 学芸員）